北陸風土彩々
ほくりくふうどさいさい

【第2回】

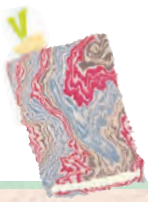
北陸の和紙

北陸に生きる、一葉の技と心。

明治に洋紙が伝わって以来、使われる機会が減少し、
衰退を余儀なくされている和紙。
しかし一方で、日本古来の紙が持つ美しさと風合いが
国内外であらためて見直されているのも事実です。
北陸もまた、和紙の伝統を現代に受け継ぐ土地なのです。

福井の和紙

1500年の歴史を持つ「越前和紙」。越前市今立地区五箇には川上御前という女神が村人に紙漉(す)きを教えたという紙祖伝説があり、良質な水に恵まれ、古くから和紙作りが盛んな地域として今なお全国有数の和紙産地となっています。現在も60軒を越える家々で紙漉きが営まれており、越前和紙を代表する技法である奉書(ほうしょ)、打雲(うちぐも)、墨流しなどの装飾加工紙が、それぞれの家に代々継承されています。



富山の和紙

富山の売薬とともに発展した「八尾和紙」は、薬を包む袋から帳簿紙、土産用の版画に至るまで、売薬に付随するさまざまな紙が作られました。「五箇山和紙」は、合掌造りの大家屋で生産され、加賀藩の手厚い保護を受けながら料紙や神社・仏閣の所用紙、障子紙などを生産したといわれています。「蛭谷(ひるだん)和紙」は、おもに障子紙として使われてきた楮(こうぞ)紙で、現在は職人ただ一人が、昔ながらの技法を守りながら作り続けています。

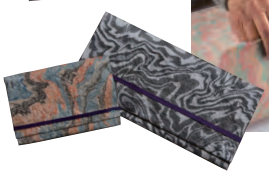
石川の和紙

「加賀雁皮(がんぴ)紙」は、加賀平野で県内産の雁皮を使って漉かれる和紙です。滑らかで光沢があり強靱、虫害に強く変色しにくい永年性が特徴です。「加賀二俣和紙」は、一説によれば僧の泰澄(たいちょう)が医王山で始めたと伝えられ、1300年の歴史を持ちます。加賀藩献上紙漉き場として認められて以降隆盛を誇り、公用紙や美術工芸紙を中心に発達しました。「能登仁行(にぎょう)和紙」は、輪島市仁行で太平洋戦争後に生まれた創作和紙。笹や杉皮などを原料とした素朴な風合いが特徴です。

越前和紙伝統工芸士
福田 忠雄さん
（ふくだ・ただお）

福井県指定無形文化財「越前墨流し」

伝統工芸士の福田忠雄さんは墨流し技術保持者の第一人者です。その制作工程は、浅い水槽に井戸水をはり、左手の筆には墨、紅、藍などの染料を含ませ、右手の筆には松脂を浸し、染料を水面につけて、松脂でつついて広げるという作業をリズミカルに100回ほど交互に繰り返し、輪状の模様を水面に作ります。水面いっぱいに広がったところで扇子で風を送り、息を吹きかけるなどして自然に生まれた模様を手漉き和紙で吸い取り、乾燥させれば完成です。同じ模様は二度と作れない、手技がなせる逸品です。



北陸に伝わる「日本の宝物」。これからも守ってほしいと思います。

北陸は、とても温かい第二の故郷

北陸は、私にとってはとても「温かい場所」なんです。社会人として、またアナウンサーとしての第一歩を踏み出したのが金沢で、たくさんの方々に温かく迎えていただいたことが強く印象に残っています。20数年が経った今でも石川を訪れると当時のことを覚えてくださっている方も多くて、北陸は今の私の基礎を育ててくれた第二の故郷と言える場所ですね。

北陸で暮らしたのはわずか2年間でしたが、たくさんの人と会い、街を巡り、おいしい食べ物もいっぱいいただいた幸せな期間でした。また、北陸の伝統文化やそれを受け継ぐ人々に触れる機会が多かったことも、貴重な経験になりました。

陶芸、漆器、友禅、和紙、水引…。日本の伝統工芸と言われるもののすべてが揃っていると思えるほど、北陸は工芸の面でも非常に豊かな土地ですよね。北陸という土地が持つ、伝統を守り伝えようとする空気の中で過ごせたことが、今の私にも大きく影響しています。ものを作る人への尊敬の念を強く持つようになったのは、北陸で暮らしたあの頃があるからですね。

使うことで、日本の伝統を守りたい

4年ほど前から、着物の着付けや和装の小物を本格的に勉強していて、テレビに自分の着物を着て出演する機会も作るようにしています。着物をはじめ、日本の伝統文化がどんどん失われていく現代。工芸や手仕事の技は人から人へと受け継がれてきたものであり、一度絶えてしまえば復活させるのは非常に難しいものです。伝統を守り、またそれを受け継ぐ方々を支えるためには、飾って眺めているだけではなく、日常の暮らしに取り入れて使っていくことが必要なのではないでしょうか。

伝統工芸は「残された昔のもの」ではなく、「今をともに生きるもの」。日本の伝統がいつのまにか消えてしまっていたということにならないために、私にもできることがたくさんあると考えています。

北陸に暮らす人々だからできること

北陸の伝統工芸品だと、加賀友禅の着物と、輪島塗のお盆や重箱などをいくつかあつらえて持っています。「普段づかい」とまではいきませんが、なるべく暮らしの中で使用するように心がけていますね。

大量生産の規格品に囲まれて暮らす現代の私たちに、ひとつひとつ丁寧な手仕事の美しさや使い勝手を教えてくれるのも工芸品の魅力ですね。自分の好みや使いやすさに合わせてあつらえるというのも、工芸品ならではの楽しみ方だと思います。

何ごとも身近にあるものの大切さには気がつきにくいものですが、北陸にはこの国で失われつつある宝物が今なおたくさん残されています。そんな豊かな土地に暮らす皆さんにこそ、伝統工芸とともにある暮らしを楽しみながら、その宝物を守り、未来へと伝えていく力になってほしいと願っています。

今回のゲスト

フリーアナウンサー

草野 満代さん

（くさの・みつよ）

1989年NHKに入局し、金沢放送局に赴任。97年にフリーアナウンサーとなった以後、現在まで多くの番組にキャスターとして出演するほか、環境省地球いきもの応援団、総務省年金業務監視委員会委員などもつとめる。映画、音楽、旅行、ドライブなど多彩な趣味を持ち、きものコーディネーターでもある。